慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	一九九三年度 三田史学会大会プログラム；一九九二年度修士論文要旨；一九九二年度卒業論文題目
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.3 (1994. 3) ,p.111(331)- 125(345)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940300-0111

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

一九九三年度　三田史学会大会プログラム（一九九三年六月二六日、慶応義塾大学三田校舎にて）

研究発表

日本史部会

1　『儀式』巻五「譲国儀」・「天皇即位儀」について　慶應義塾大学（大学院博士課程）　藤森健太郎
2　鎌倉幕府の買得安堵　東北大学（大学院博士課程前期）　七海雅人
3　堺における遣明船と禅宗勢力　慶應義塾大学（大学院修士課程）　伊藤幸司
4　近世後期農民の日常行動範囲――美濃国楡俣村庄屋の事例――　慶應義塾大学（大学院修士課程）　伊藤明

東洋史部会

1　宗族と宋代士太夫徙居に関する一考察　慶應義塾大学（大学院博士課程）　松田恒尚
2　第二次内乱とアラブの支配者観　慶應義塾大学（大学院博士課程）　高田康一
3　トルコ絨毯商人のライフヒストリー　慶應義塾大学　坂本勉
4　韓非子における天と人について　駒沢大学　茂沢方尚

西洋史部会

1　アウグスティヌスにおける政治的権威の基礎　慶應義塾大学（大学院博士課程）　鎌田伊知郎
2　十八世紀ポルトガルにおける啓蒙思想　広島大学（大学院博士課程後期）　疇谷憲洋
3　十八世紀イギリスに見る所領管理専門職とその労務対策――ナサニエル・ケントの場合――　東邦大学　高橋裕一

4　アメリカにおける中絶問題――中絶合憲判決の社会的背景――　同志社大学（大学院博士課程）　小野直子

民族学・考古学部会

1　頁岩製石器の光沢――山形県お仲間林遺跡出土資料の検討から――　慶應義塾大学（大学院修士課程）　岡沢祥子

2　貝塚遺跡における季節査定の問題点――茨城県上高津貝塚出土動物遺体の層位的検討――　慶應義塾大学（大学院修士課程）　真貝理香

3　有明海における鍛冶屋の知識　慶應義塾大学（大学院修士課程）　巴森太郎

講　演

「進歩の理念について」　明治大学経済学部教授　三宅正樹

近代ヨーロッパ思想史における進歩の理念の誕生は、一七世紀のフランスで主に繰り広げられた「古代・近代論争」と密接に関連する。歴史学者のビュアリー、トインビー、社会学者のニスベットが等しくこの論争に注目している。東アジアの思想史については、康有為、福澤諭吉、漱石の、近代化への対応の違いが重要であろう。

一九九二年度修士論文要旨

〔日本史学専攻〕

「中近世移行期における都市の研究
—京都頂妙寺十六本山会合用書類を中心として—」

古川　元也

本稿では、京都頂妙寺から発見された「十六本山会合用書類」の分析を中心に中近世移行期の都市内部について考察した。頂妙寺は法華宗十六本山の一つとして中世以来存在している名刹である。扱った史料の性格上、考察の主体となる組織は法華宗に限定されるが、当該期京都市中の史料的空白を埋めるものであり、都市論として問題提起をした。

まず「十六本山会合用書類」の史料的性格を考察し、同文書群が中近世移行期に法華宗内で行われた会合に関係するものであることの結論を得た。また同会合の決定により天正四年には洛中で、天正七年には堺で、法華宗による勧進活動が行われていることを明らかにした。これらの勧進では集められた資金が法華宗内の「堂・社屋」の建設には使われず、当該期武家権力に対する支出に使われていたのである。すなわち当該期には寺院や町共同体から禁制発給に対する礼銭等が上納されているが、勧進で集められている資金もこのような用途に用いられている。この勧進を末端で支えていたのは個々の法華宗檀徒であり、勧進の規模から天文法華の乱後も法華宗檀徒の組織・財力が温存していたことがわかる。

さらにこの勧進を行った法華宗本山の合議組織を考察した。考察に際し、時代的・地域的基盤を共にする上京立売組の集会組織との比較をし、両者が極めて類似した精神的基盤を持つことを明らかにした。この結論は法華宗と町共同体の接点考察に示唆を与える。またこの共通点の検証としては、法華宗の集住地域として名高い「新在家」を取り上げた。「新在家」は織田信長による上京焼打ち後に、同政権により創出された特異な町である。その町が法華宗と関係が深い地域であることが何を意味するのか、『言継卿記』等を手がかりに考察した。結論として、当該期における「新在家」の先進性・信長による経済的な配慮、などが考えられここでも法華宗檀徒の組織力・財力が暗示されるのである。

なお本稿に関連する「非文献史料の活用」と「「預置」ということ」を補論とした。

「物価の地域間格差の縮小過程と地域経済の変貌」

加藤　要一

徳川期の日本は、幕藩制のもと各藩が独立した経済単位となっており、物価の地域間格差が大きかったが、明治期にはいると藩の障壁が取り除かれ、海運・道路・鉄道などの交通機関や、電信などの通信網が整備されるにつれ、物価の地域間格差が縮小していった。本論文は明治以降の物価の地域間格差の縮

小過程を考察したものである。

前半では全国的概観をなし、いつ国内統一市場が形成され、一物一価の法則が成立するかを確定することを試みた。この試みは、封建社会から資本主義社会への移行過程における、国内統一市場＝「国民経済」の成立時期の確定への重要なメルクマールを提供するという点で意義がある。史料としては、『帝国統計年鑑』、『農商務統計表』、『卸売物価統計表』、『物価統計表』、『府県統計表』を使った。「物価の地域間格差」の指標としては物価の地域間の変動係数（＝標準偏差／平均）を使った。上記の史料から、なるべく長期にわたり途中の欠年なく、物価のデータを得られる都市と商品を選び、各商品ごとの物価の変動係数を算出し時系列化する。この系列をもとに、各商品毎の比較をするとともに、各商品毎にウエイトをつけ、農産物、非農産物価格の市場の統一性を表す指標を求めた。しかし、変動係数のどれくらいの数値をもって統一的市場が確立されたとするのかが問題として残った。

後半では、明治以降の山梨県を取り上げた。山梨県は地理的には四方を山脈に囲まれ、鉄道開通前には、封鎖的な経済をもっていた。県外への交通路としては陸路峠を越えるか、富士川を舟で航行するしかなく、輸送・取引費用が高かった。しかも、鉄道開通が明治三六年と全国の中でも遅く、輸送・取引費用の高さは、当時の県当局者、地主などの地方名望家、消費者たちに認識され、地方・中央の政治過程や、交通政策や交通の発達、地域経済の展開に大きい影響を与えた。後半では輸送・取引費用と地方政治・地域経済との関係を、当時の人々の認識と交通の発達を媒介項として考察し、山梨県が全国的統一市場へ包摂される過程を描いた。

「都市の近代化と忌避施設
——十九世紀末　東京の墓地と火葬場——」

日朝　秀宜

都市には都市生活を送るための様々な施設が存在する。それは、上水道や下水道であったり、電線やガス管であったり、道路や橋梁であったり、駅や港湾や交通機関であったり、実に様々な形態の都市施設が存在する。それらの中には、人間が都市において、より「快適」に生活するための施設もある。例えば、下水処理場や塵芥焼却場などのいわゆる「処理施設」があげられよう。これらの施設は、誰もが利用するにも関わらず、しばしば人々の忌避の対象になった。本稿においては、このような施設を「忌避施設」と称することにするが、この「忌避施設」の歴史的な変遷過程を通じて、都市をとらえることを目的とする。具体的には、十九世紀末の東京を舞台として、「忌避施設」の中でも、特に「死体処理施設」とでも言うべき墓地と火葬場を対象にする。そして、公文書・地図・統計などを用いて、都市施設としての墓地と火葬場を通して十九世紀末の東京を見ることによって、近世都市から近代都市への移行過程、およびその後の近代都市の発展過程における都市生活の一面を明

らかにすることを試みようとするものである。

本稿においては、次の諸点が明らかになった。

①新政府による初期の諸政策（神仏分離や廃仏毀釈など）は墓地や火葬場にも及び、神葬地が新設され、火葬は禁止された。

②新政府による地租改正や首都整備のために、「朱引内」における埋葬は禁止され、東京の墓地は郊外へ求められた。

③近代になって新設された共葬墓地には、近世以来の土地と資金が利用された。

④廃仏毀釈の後退により火葬は解禁されたが、「朱引内」における火葬場は認められなかった。

⑤火葬場の位置は都市周縁的な性格をもち、都市の発展による市街地の拡大に伴って住民との間に摩擦が生じるが、その遠心的な移動には一定の限界があった。

⑥墓地はさらに郊外へ求められていくが、無縁墓の問題をはじめとして、墓地不足の問題は解消されずに現在に至った。

以上により、東京の墓地と火葬場を通して見た都市の近代化とは、次のように結論を下すことができるであろう。

(1)近世都市から近代都市への移行過程において、江戸＝東京の連続性という面では、土地（特に旧武家地）の利用が指摘・評価されているが、墓地と火葬場についても同様のことが言える。

(2)遺骨や遺骸を死穢の対象とする人々の忌避感・公衆衛生・都市計画・地租改正の諸点から、墓地や火葬場は都市の発展にともなって郊外へと遠心的に移動させられた。

(3)近世の寺院にかわって、大蔵省・内務省・警視庁・東京府・東京市などの諸官庁すなわち近代国家が人々の死・葬送を管理するようになった。

このように、近世都市江戸の基盤の上に、東京が近代国家の首都としての機能を整備して行く過程を明らかにすることによって、日本の近代化の特質の一面を浮き彫りにすることを試みた。

「布哇出稼移民の郷里への書翰を通してみた移民集団の諸階層」

赤木　妙子

『古文書研究』三八号に掲載。

[東洋史学専攻]

アッバース朝時代の食文化

―ワッラークの料理書を中心として―

鈴木　貴久子

一〇世紀のイスラーム世界は政治的にはアッバース朝政権下での統一を失い、分裂の時代だったが、文化や学芸の面ではまさに「黄金時代」と言えるべき時代だった。

ところがこうした「黄金時代」に生きた人々がどのような社

会生活を営んでいたのかについての研究は、今日に至るまではなはだ少ない。本稿では都市の人々の社会生活における食にテーマをおき、人々が何をどのように食べていたのか、食のマナーとはどのようなものだったのか、および社会の食に対する観念等について考察を試みた。

史料として一〇世紀のワッラークによるアッバース朝の宮廷料理書を中心に取り上げた。料理書の記述を、1．材料（生産）、2．調理（加工）、3．医学観念と食事作法（食事行動）に分類、分析し、イブン・ワフシーヤの農書やムカッダシーなどの地理書、および文学、アダブ書からの食の記述をあわせ考察した。

材料についていえば、料理書で使用された材料は一〇〇種類以上にのぼる。それら材料の供給を可能にしたのは、農業技術の進歩による新しい作物品種の栽培の拡大と、中国・インド・東南アジア・アフリカ地域に及ぶ広範囲で展開されたムスリム商人の商業活動だった。

料理の特徴についていえば、肉の煮込み料理が中心であり、その味つけは胡椒、シナモンや丁字をはじめとして多種類の香辛料、果汁、乳製品の組み合わせによっていた。またワッラークの料理書の料理はそれ以後のイスラーム世界の料理に大きな影響を与えた。

医食同源というイスラーム医学の考え方は、食に対する観念の根底をなしていた。材料は《乾・湿・冷・熱》のいずれかの性質を持つもので、各人の体質に合わせて摂るべき薬とみなされた。また都市の富裕階層の社会では、手の洗い方や食べ方についての細かいマナーがすでに体系的に確立していた。

以上の結論として、一〇世紀のアッバース朝宮廷社会で一つの新しい食文化が確立したこと、その食文化はそれ以後のイスラーム社会の食生活や食文化に大きな影響を与えるものだったことが明らかになった。

「ムハンマド・アブドゥフ
―イスラム改革におけるその「法」思想―」

川原　由美子

アラブ世界へ帝国主義が押し寄せていた一九世紀末、エジプトのイスラム改革運動はムハンマド・アブドゥフ（一八四九～一九〇五）の存在抜きには考えられない。この小論では彼が編集に携わっていたエジプトの官報『エジプトの出来事 al-Waqāʾi al-Misrīyah』に掲載された彼の論文より彼の法思想を追求し、アブドゥフがそれをイスラム改革にどのように反映させようとしたのかを考察した。

アブドゥフの生涯は激動するエジプト史と重なっている。イスラム世界でかつて重要な役割を果たしてきたウラマーの地位が低下し、西欧列強の勢力が増大するなかで、自らもウラマーであったアブドゥフはイスラム法、シャリーアの遵守を強調する。しかし、西欧起源の法が導入されていた状況下でそれは困難なことであり、シャリーアの原理に沿った政治の実現のため

にアブドゥフは議会（al-Shūrā）制度を義務として主張する。シャリーアに沿った法を制定し、権力者の行政を監視する役割を議会が果たすことで、ウラマーがかつて担ってきた機能を議会に求めたのである。

ところで、アブドゥフのイスラム改革運動ではムスリム全体の連帯ではなく、エジプト人としての意識がかいま見える。これは諸外国との接触によって、〝ムスリム、エジプト人〟としての自覚を持つようになったと言えるのではないだろうか。そしてエジプト人に主権が帰することを明確にして、彼は祖国（al-watan）という言葉を政治的意味に捉えていたと考察した。

結論として、アブドゥフは外部からの圧迫に対するためにエジプト人としての意識を確立し、それを実現してゆくために議会制度を採用してイスラム法であるシャリーアに基づく政治を実行しながら、エジプト人が主権を持つ国家の確立を目指したのではないか、ということを導き出した。

[西洋史学専攻]

「外交評論家としての清沢洌—その国際関係認識の際の基本的思想枠組みについての一考察—」

岡本　英敏

外交評論家をもって自他ともに任じた清沢洌の外交思想についての研究。特に、清沢が国際関係の舞台を認識するに際しての基本的な思想枠組みとは如何なるものであったのかということについて考察していくことにする。

清沢の晩年の手になる『日本外交史』「序論」には、彼が国際関係の舞台を認識するに際しての基本的な思想枠組みが明瞭な形で述べられているが、それが如何なるものであったのかをまず「序章」として検討する。端的に言ってその基本的な思想枠組みの骨子は、[一]、国際関係を律するものとしての経済的要素を重要視する態度、いわゆる経済合理主義的な国際関係観、[二]、それに加えるに、国際関係の舞台を認識するに際しての人的要素、すなわち政治家の行動とその役割と、この政治家の行動とその役割を枠づけるところの世論という要素を重要視する態度、という具合にまとめ得ると言える。

以上の清沢における基本的な思想枠組み、すなわち上記二つの命題の具体的内容を明らかにするために、清沢の様々な場面での評論活動の実際に焦点を当て、それらを検討することを「第一章」、および「第二章」の課題としたい。すなわち「第一章」においては、上記[一]の命題の具体的内容を、「第二章」においては、上記[二]の命題の具体的内容を検討していくことにする。

さらに「終章」（補論）においては、これまでの考察で明らかになった清沢の立場、特にその経済合理主義的な国際関係観が、当時の時代状況の中でどの様な位置を占めたのかということを、甚だ不十分な形ではあるが、他の論客達との比較の上に検討していきたいと思う。

「クレルヴォーのベルナールのマリア論
―聖母信仰史上の位置―」

西尾　暢子

クレルヴォーのベルナール Saint Bernard de Clairvaux（一〇九〇―一一五四）に対する旧来の評価は、彼をマリア信仰の熱烈な推進者と見做すものだった。しかし近年の諸研究は、彼のマリア論の中にむしろ信仰発展を抑圧する面を見出そうとしている。本修士論文は、こうした見解の重要性を認識した上で、これに若干の修正を加える試みである。

ベルナールは、西欧のマリア信仰発展の時代である一二世紀を代表する聖人の一人として知られる。だがその死後、主として偽書や根拠の判然としない伝説に基づき、マリア信仰の熱心な擁護者として彼を過大評価する風潮がおこった。J. Leclercq を中心とする近年の研究者達は、従来の諸研究がこの風潮を無批判に受け入れ、ベルナールの信仰がマリア信仰だけに、その神学がマリア論だけに集約されるかのような誤解を生じさせた、としてこれに異を唱え、むしろ教義発展に消極的な、伝統の維持者としてのベルナールの性格を、幾つかの根拠を示して明らかにしようと試みている。

その最大の根拠として、当時フランスに伝播した「無原罪の御宿り」の祝日導入をめぐって、ベルナールが書いた激烈な抗議の手紙が挙げられる。ここでは、聖書、教父の伝統に忠実で、当時の教会公認の諸教義を更に発展させようとはせず、新たなテーマを提示するといった革新的なことも好まない彼の性格が明らかなものとなっている。同時代の遙かに積極的なマリア論神学者と較べたとき、ベルナールはむしろ教義発展の抑圧者でさえあったと J. Leclercq 等は述べている。

しかし、近年の研究動向に対し、無視できない新たな批判も示されている。近年の研究者の多くは、長年にわたる誤解を解こうとするあまり、時にベルナールの、マリア信仰発展への寄与を過少評価するきらいがある。

一一世紀後半以降のマリア信仰発展の大きな要因の一つとしては、一二、一三世紀に高まりをみせるキリストの人性への注目がその母マリアへの信仰と結びついた点が指摘される。ベルナールは西欧のマリア信仰に転換をもたらしたこの新しい傾向の重要な担い手の一人であった。とすれば一三、一四世紀のマリア崇敬熱高揚の下地は彼が準備したとさえ言えるであろう。

以上の点を踏まえ、私はベルナールをマリア信仰の推進者であると見做しても差し支えないと考える。

しかしベルナールのキリスト論とマリア論の結びつきを問題とする研究書を現段階では見出せず、本修論はこの問題を掘り下げることができなかった。今後の課題としてゆきたい。

「中世盛期のシトー会修道院をめぐる社会・経済状況
―研究史の現状とヴィレール・ラ・ヴィル修道院の場合―」

舟橋　倫子

中世盛期にシトー会は全ヨーロッパに驚異的発展をとげ、宗教界のみならず、当時の社会全体に様々な影響を及ぼした。シトー会の何がそれほど当時の人々を引きつけ、どのような社会・経済状況がその発展を可能にしたのかは、多くの歴史家の関心を引いてきた。本稿では、まず現実のシトー会士の姿を追究するために、シトー会修道院の社会・経済生活に注意を向け、それに関する学説史の整理を通じて現時点での論点を明確にした上で、史料と研究の蓄積に恵まれたヴィレール・ラ・ヴィル修道院の検討から、所領経営の実態と周辺社会との関係を明らかにしようと試みた。

シトー会修道院をあまりに理想主義的にとらえていた古典的見解と、その補正を目指した説への批判には、シトー会に好意的なものと、批判的なものとの二方向があった。その後、両者の間に位置しながら、地域ごとの現実を解明する研究が多数発表され、その中で、未耕地への創建の否定、当初からの直接経営と間接経営の並存、賃労働者の恒常的存在、商品生産の実践と商業関与を認めつつも、地域開発への貢献を評価するのが、一九八〇年代ヨーロッパ学界の共通認識となった。英語で発表された仕事は、同時代社会構造の中でのシトー会の役割という、新しい論点をつけ加えるに至っている。

ヴィレール修道院一二世紀の文書史料から、本稿ではグランギアであるヌーブ＝クール（N. C.）に関する文書と、教皇と領邦君主から修道院に発給された文書を詳しく検討した。N. C. 文書は、開発の進行と権利関係の錯綜の中で、既存の諸利害に割り込んで、土地に関する諸権利を継起的に獲得して、在地有力者との衝突を招きながらも、永続的な相互受益関係をも結んでいった修道院の姿を描いている。教皇と領邦君主の文書は、十分の一税免除特権に関連して、牧畜を中心とした直接経営を示しており、また流通税免除特権に関連して、その牧畜が商業目的で、家畜は公道を通って市場へ移動させられていたと推測させてくれる。

ヴィレール修道院の史料分析の成果は、研究史が提起する主要論点に幅広く答えるものではない。中でも、労働力の問題に関して殆ど材料が得られなかったのは残念である。今後は地名の検討といった、本稿では十分に果たせなかった様々な作業を通じて、ヴィレール修道院の社会・経済生活について、さらに多面的な考察を目指すとともに、シトー会全体の問題にも迫ってゆきたい。

〔民族学考古学専攻〕

「アケメネス磨崖王墓の構造比較から見た編年」

石井　洋介

「村落の空間と歴史
—沖縄県宮古郡上野村・野原の場合—」　大熊　亨

「多摩川下流域・鶴見川流域の横穴墓の研究
—内部構造・副葬品からみた地域性とその解釈—」　大西　雅也

「円筒印章の『紹介の場面』に見られる神と王」　菊池　知佳

「西部伯耆における切石積み横穴式石室の分類と編年」　山田　真一

一九九二年度卒業論文題目

〔日本史学専攻〕

古代における蛇信仰　木下　知子
膳氏と志摩・若狭の関係について　富永こずえ
律令国家と衣服制　吉田　浩子
持統天皇の吉野行幸　岸　あかね
元明天皇と不改常典　市東万里子
飛鳥の諸宮と日本都城制　田中　理恵
奈良時代における中央の交易　森山乃里子
初期荘園―越前国桑原荘を中心に―　松本　圭司
六・七世紀の軍隊　曽根　竜夫
古代国家における軍事体制　石橋　賢
磐舟柵をめぐって　瀬賀　知文
古代木簡と史料性　山口　徹
西方浄土曼荼羅と阿弥陀来迎図　渡辺　温子
法華八講と藤原氏　岡田えり子
「御薪」の源流とその政治的意義　荒野　信子
天皇喪葬儀礼への関与とその改姓の原因からみた古代氏族、土師氏の性格　児玉　類
律令国家と陰陽道―祥瑞災異思想からみた、陰陽寮成立前後―　柳田　邦子
都鄙和睦関係史料の考証　岩崎　正史
比企一族と鎌倉幕府　吉森　大介
江戸浅草観音の開帳―『浅草寺日記』を中心に―　柴田　信嘉
日本橋魚市場の成立―佃村漁民の江戸移住について　富沢　達三
享保期における鷹狩り　西村　彰
長州藩に討幕派における矛盾と断絶　廣田　峰男
江戸の都市構造―明暦期から享保期まで―　藤生　洋
江戸時代の博奕―法制史料にみる博奕と博徒―　山田　慎
陵軍と警察の「分化」における明治六年川路利良による「建言書」の意義　加藤　尚
「施行」から見た〝おかげ参り〟　清水　直子
昭和初めの力士達の反乱（春秋園事件）　龍田　浩一
一地方鉄道会社を通して見る明治期の政府の鉄道建設政策―京都鉄道株式会社の生涯を通じて―　久保田祐二
日本政府の対中国観―清国人取扱（規則）に見る―　佐藤　善一
戦後経済犯罪の史的考察　河内　真哉
奥羽越列藩同盟の性格　杉野　良暁
一九四五・一九九二年間の朝日新聞における加害者意識の芽生え　土田　成彦
明治教育の一考察―明治二十年代から三十年代の実業教育を中心にして―　大関　健
石川信吾にみる帝国海軍の南進政策　佐藤小里江
併合に至るまでの日韓関係の推移　佐山　信寛
朝日新聞の社論転換についての一考察―満州事変を中心にして―　村木　智一

後期水戸学の変革性について　山本　温
〔東洋史学専攻〕
ヘブライ語の復活をめぐる一考察　浅野　隆雄
一九世紀後半ジャワの巡礼活動とイスラーム活性化
―ジャワ西部バンテン地方を中心に―　川合　朝幸
レーニン民族自決論とその変質―タタール人
ムスリム・コムニストとの対立の中で―　鈴木　清
ハニコフから見た一九世紀半ばのブハラ都市誌　関根　良則
一八七二―一九〇五におけるバクー石油産業の発展と
社会的変化の考察―ロシア史上初の労使団体協約への
プロセス―　森田　義大
一七世紀イスタンブールにおけるギルド構成員の
社会的結合の心理的基盤について　桜井　紀邦
アチェのイスラム
―スヌーク・フルフローニュの視点を通して―　田平　恵実
バルカンのチフトリキ　日高　史絵
カラ＝テオドリ・パシャ統治下のクレタ島情勢　堀井　聖恵
林献堂と台湾民族運動　梶谷　猛
中国の美人について　小松　理香
底辺からみた中国文化大革命　高野　遍
初期植民地時代における香港政庁と中国人の関係　中野　圭介
一九六七年香港騒動についての一考察
―文化大革命との関わり―　吉田　朋子
エリオット―その人とその外交政策について―　岩田　純子
不空三蔵の時代と不空三蔵の目指した理想について　海野　裕吉
李卓吾の思想について　遠藤　洋
解放後の中国の医療衛生産業と「はだしの医者」の発展　岡本　文子
蘇軾の養生について　勝村　元彦
満鉄の実像　紅露　和之
神戸華僑のアイデンティティーの変革
―子弟教育を中心に―　雑賀　千寿
民国初期の軍閥政権と阿片税　酒井　美香
モンゴル革命とソビエト・ロシア　白石　暁子
フィリピン革命と日本の関係　鈴木信八郎
宮崎滔天の思想と実践としての中国革命　竹内　真司
山東の義和団運動に関する一考察　成沢　恭子
則天武后の政治姿勢―人材活用方法に関する考察―　林　りん
一八九四年香港におけるペスト流行と西洋医学による
中国社会の混乱　森　まり
劉銘傳の台湾における近代化建設について　王　昭仁
晏陽初と郷村建設運動　山本　真
顔文推論考―祖先から見る顔文推の姿―　伊藤　範洋
西周「強国」に関する一試論―室鶏紙坊頭、
竹園溝、茹家荘墓地出土青銅容器の検討から―　丸山　雄
多民族都市バダヴィアの人々　鈴木　康史

一八・一九世紀におけるインド＝ムスリムの改革運動の系譜
―サイイド＝アフマド＝ハーンを中心に―　長濱　真一
イスラムの聖都エルサレム―聖地性の由来　元山　聰子
ミッションは何をしたのか―一九世紀のザンジバルにおけるミッションの活動に対する考察―　青山　泉
ジャワ・イスラム化とスーフィーの役割における一考察―ワリ・サンガを中心に―　佐々木　剛
バスラ・クーファにおけるアラビア語文法学の成立とそのコーラン学との関係　園田　洋介
民衆におけるカリフ像
―歴史史料としての『アラビアンナイト』―　平野　豪
アレッポの都市形態（マムルーク朝、オスマン朝）　宮川　裕子
ペルシアの風景世界―イランにおける「庭」空間の展開―　吉崎　睦

［西洋史学専攻］

ドイツ東方外交の検証
―ウイリー・ブラントについての一考察　大島玲二郎
メッテルニヒのヨーロッパ像とウィーン会議　岡田　光司
ヴィクトリア朝時代のイギリス社会の世相
―中流階級の立身出世とスノバリー　風間　宏
ヤルタ協定と第二次世界大戦下の米国の中国政策　川村　幸城
ナチスの宣伝活動における大衆操作と第二次大戦の勃発　古賀　光
近代ロシアの工業発展の構造とその限界
―ウィッテ体制を中心として―　小泉　富彦
アルジェリア問題に関するA・カミュの言論　小室　幸宏
外見的立憲制とドイツ近代化の矛盾
―プロセイン憲法紛争を中心として―　絹村　正雄
ソ連邦におけるノーメンクラツーラの意義
―スターリン時代を中心として―　小林　恵子
戦後日本の文化外交
―国際交流基金にみる外交政策の変化―　桜内　友子
大衆動員の兵站術としてのデザイン
―現代芸術の政治学―　白井有里子
パレスチナ問題にみるイギリス中東政策の功罪　高田　邦久
近代黒人解放運動におけるアメリカ黒人の自己実現　田中　聡
社会主義と民族問題―革命ロシアの民族政策と
スルタン・ガリエフの民族共産主義―　中川　弘枝
アメリカの女性解放運動とアメリカ合衆国憲法の
平等権修正条項　林　正浩
フルシチョフとノーメンクラツーラ　室賀　直人
イギリス病とジェントルマン―その文化史的考察―　長田　陽一
三月革命の歴史的意義　吉川　子音
中世初期における教会と民衆のキリスト教化　花方　陽子
パライオゴス朝成立の要因について　山下　拓也
中世の結婚制度―世俗権力と教会の対立をめぐって―　小澤　寿恵

ボルジア家をめぐる一考察　志賀　純子
ロシア国家の形成と騎馬民族　竹村　真生
自然観の歴史的変遷　樋上　智子
グノーシス主義をめぐる一考察　田口　博子
バルト三国―エストニア・ラトヴィア・リトアニア―　林　佳代子
普墺戦争　波多野秀幸
《闘うデモクラシー》―アメリカ合衆国のダイナミズム　石川　尚慶
フォーディズムの考察　鎌滝　裕次
通貨の再構築―一九二〇年代におけるドイツのインフレーション―　桂　真治
フランコ体制前史から見たスペイン現代経済・政治史　北城　昌子
ヒトラーの政権獲得闘争期における突撃隊（SA）の存在　三好　英一
ヴェトナム戦争　斉藤　慎
一九一七年革命における大衆とレーニンの役割　高木　秀雄
ナチス・ドイツにおける人権侵害の態様とその理論　高橋　光治
革新主義時代における連邦政府の機能の変化　米今　精一
十九世紀イギリスにおける旅行業の成立　佐野　孝司
既婚女性の賃金労働にみる社会矛盾―十九世紀イギリスについて―　木島　亮子
イングランド国軍の成立―暴力装置としての性格から見た新型軍の歴史―　北條　雅人
ボーア人国家建設理念の形成　宇佐美みか
一八四八年ウィーンにおけるユダヤ人とプロレタリアート　城山　英巳
フランスにおける美食文化の成立とその過程　村田　泰子
アイルランド民族意識の目覚め　下山　陽子
アメリカ圏黒人奴隷制度と世界従属構造　池田　夕子
アメリカにおける違憲立法審査権の確立　中嶋　明湖

［民族学考古学専攻］

ゴーギャンのタヒチ観について　浅川　浩尉
分棟型民家の研究―日本とオセアニアを比較して―　石上　史明
日本の丸木舟―とくに用材変遷についての研究　伊藤　匠
アッシリア帝国の軍事技術　勝見　靖英
ブルー・ノートの意義性　河村　建介
マヤ古典期における人身犠牲　神戸　晴子
七世紀のシュリーヴィジャヤ　貴志　高陽
石造墓標の形態変化と近世近畿の石材流通―淀川・木津川流域を中心に―　朽木　量
談山神社及び春日大社における特殊神饌についての一考察　高村　篤子
サモアのカヴァ儀式とその社会的役割―オセアニア他地域との比較を通して―　田口　彩子

妖精伝承に見るアイルランドの風景　竹下　恭子
スコットランドにみる民族的アイデンティティー
—一七、八世紀のウイスキー課税史を中心に—　出来田敬司
イスラエル預言者とシャーマン　藤井　麻理
トカラ列島悪石島のボゼの性格についての考察　藤野　泰彦
グリオについて—西アフリカの口頭伝承—　村田　光陽
バリ島の神像チリーについて　宮田　京子
差別論における関係意識の構造論的分析
—鏡の象徴論的意味—　渡辺　精一